

みる つくる かたる

APPRECIATE

DISCUSS

CREATE

VOL.28 NO.1
(通巻83号)
2001
ART NEWS
千葉県立美術館



【企業デザイナーとして】

石井康治（昭和21年～平成8年）は市原市に生まれ、千葉市に在住しました。東京芸術大学美術学部工芸科鍛金科専攻を卒業。東洋ガラス株式会社に入社し、デザイナーとして手腕を発揮しました。

この時期、桃屋の「ごはんですよ」やカティサークの瓶などを手掛け、独立後も「いいちこ」のシルエットボトルやAGF「炭焼珈琲」ボトルのデザインで、ジャパンパッケージデザインコンペティションの特別賞や優秀賞を受賞しています。しかし製品のサンプル作りに通った町工場で、職人の宙吹きに立ち会ううちに自らの作品を作りたいという思いが募ります。

【スタジオグラス運動と石井】

スタジオグラス運動という現代ガラスの造型運動が昭和30年代に、欧米で始まりました。小型の窯が開発されたことで、それまでガラス会社が一手に手掛けたガラス作品の制作を個人作家が構想から制作まで自由に行おうという運動でした。石井は、昭和52年に独立。ガラス作家として歩み始めます。この頃には世界的にスタジオグラス運動が盛んで、日本にもその波が来ていました。

そして、個展や千葉県展、千葉美術工芸会展、千葉工芸作家展、日本のガラス展などを舞台に作品を発表します。

石井の作品は手吹きで作られており、そのうち笛（はこ）は型に入れて吹き、その他の作品は宙で吹いて作られています。またガラスを酸で腐食して、きめ細かなざらつきを作るフロストという技法をほとんどの作品に用いています。

ここで時代を辿りながら、いくつかの代表的な作品及び特徴を紹介します。

【潮騒】

昭和56年、独立後、最初の代表作となったのが「潮騒」や「夕映」の連作でした。この頃は変幻自在なガラスの特質に魅了され、文様や色合いよりも、形のおもしろさを重視した作品を作っています。

【木影】

昭和60年代に入り、だ円状をなした形の作品が作られるようになります。それは絵画のように自然の情景を作品に表現するのに円形より表現しやすかったからです。「木影」では、ずっと幾重にも伸びた樹木が銀色に光る霧の中にあるようです。このような雰囲気、作品に金銀箔をつけた上にガラスのパウダーを巻き付けて表現しています。

作品の題材として好んだのは、青森の八甲田山から奥入瀬溪流を辿り、十和田湖を巡る四季の自然でした。木立をモチーフとした文様は、後の樹映の連作へとつながります。この年、ランプの制作も始めます。

【花の景】

平成元年には千葉市に石井ガラススタジオを設立。平成2年からは「花の景」に代表される文様の制作を

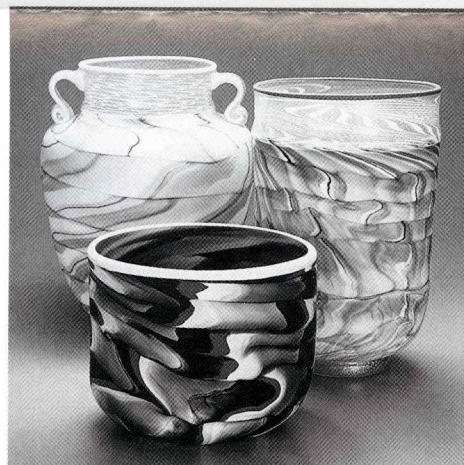
始めます。「花の景」では、初春に、春の兆しを伝える虹、雪の間をぬって流れる川、咲き始めた花などを表現しました。ガラスのかけらや自ら作成したガラスの細い棒を、作品に巻き付けて作成しています。

【彩烈文器、汎状文器、環状文器】

平成3年には石井ガラススタジオ青森工房を開設。充実した環境

の中で、同年には「彩烈文器」、平成4年には「汎状文器」、平成5年には「環象文器」というように、年々新たな試みに挑戦します。

「彩烈文器」は、繰り返しのマーブル模様が印象的です。成形したガラスの上を何色か色を付けた着彩用のこてで、巻くように色付けします。季節の変わり目に自然が一瞬だけ見せる彩りの輝きと躍動を表現しています。



彩烈文器（3点）1991年

「汎状文器」は、モールという型を用いて、優雅なストライプ模様を作り出した器です。

「環象文器」は成形したガラス器の所々に厚く盛り

上げたガラスを色々な方向に埋め込んで作ります。焼成の際の、色ガラスの膨張率の違いが水面に映る樹木のような模様を作り上げます。遠い記憶の中の潮騒や環礁の島々、風に揺れる植物の影などがモチーフとなりました。

【彩花文器】

石井はイタリアのムラノ村を発祥の地とするミルフィオリ（千の花）という花柄の薄片を現地から取り寄せながらも、平成6年には、自らの日本の花のイメージに合ったミルフィオリを作成し、作品に用いています。咲きほこったかと思う間もなく散り乱れる花の一瞬の美しさの中に生命の有終への思いを託し、永遠に凍結させたのが、「彩花文器」です。同年からガラス管も手掛けました。

【樹 映】

木立をモチーフとした連作は、平成7年には奥入瀬溪流の四季ごとに制作した「樹映」などで、鮮やかな展開を見せます。この翌年、制作を始めて20年の記念展を開催しますが、同年11月、青森にて急逝しました。

【展示について】

この展覧会では、石井康治のガラス作品から、花器46点、ランプ19点、高杯6点、ガラス管10点、小管12点の計93点と関係資料により、その足跡を辿ります。

(相川 順子)

開館時間 午前9時～午後4時30分

入 場 料 無 料

休 館 日 ・月曜日（ただし、12/24、1/14は開館し、12/25、1/15は休館）
・年末年始休館（12/26～1/4）

収蔵作品による企画展

フォンタネージとバルビゾン派

平成13年11月10日(土)～平成14年1月27日(日)

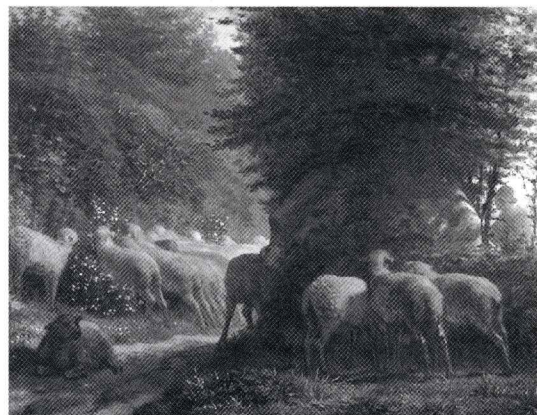
現在、第8展示室にて、「フォンタネージとバルビゾン派」展を開催しています。今夏に開催した「浅井忠とその周辺」展でイタリア人画家フォンタネージの作品や、浅井忠によるミレーの木版画の模写を御覧になった方もいらっしゃるでしょう。

浅井は、工部美術学校でフォンタネージから本格的な西洋美術を学びましたが、フォンタネージが授業の中で紹介したのが、ミレーやコローなどバルビゾン派の画家たちの作品でした。

19世紀イタリアを代表する風景画家であるフォンタネージは、コローと親しかったラヴィエとの交流や、イギリスでのターナーやコンスタブルの絵画との出会いなど、英仏の文化に触れたことで、ひたすら自然の表現に固執し続けました。

彼の在日期間は約2年と短いものでしたが、浅井や小山正太郎、松岡寿など次代の日本近代洋画を背負った画家たちに多大な影響を与えました。その意味で、日本の近代洋画は間接的にバルビゾン派の影響から出発したといえます。

「バルビゾン派」とは、印象派の登場以前、1830年から70年頃まで、パリ郊外のフォンテンブローの森やバルビゾンとその周辺で自然や農村風景を描き、新し



ミレー「垣根に沿って草を食む羊」1860年頃

い風景画を開拓したフランスの風景画家たちを総称したもので、ミレーなど代表的な画家たちの没後、19世紀末に名付けられたものです。

流派として存在したものではないため、自然を描くことでは共通していても、それぞれの描く自然はかなり異なっていますが、歴史画や肖像画優位の当時のアカデミズムに反し、野外での観察に基づいてありのままに表現された彼らの絵画は、今日まで高い人気を誇っています。

この展覧会では、当館が所蔵するフォンタネージの作品10点と、ミレー、コローなどバルビゾン派の代表的な画家10人の作品19点を展示しています。19世紀のヨーロッパで花開き、日本の近代洋画の幕開けにも影響を与えた、11人の自然に魅せられた画家たちの世界を、御堪能いただければ幸いです。

企画展

「第25回千葉県移動美術館」は、四半世紀の間、本館が収蔵する日本画、洋画、彫刻、工芸、書、版画の作品を中心に、県内各地で開催してきました。節目となる今年度の会場は、次の2箇所です。お近くの方は是非ご鑑賞ください。

■鋸南町立中央公民館

安房郡鋸南町吉浜516 TEL0470-55-4151

会期：11月13日(火)～11月25日(日)

■さんぶの森文化ホール

山武郡山武町埴谷1904-5 TEL 0475-80-9100

会期：11月28日(水)～12月11日(火)

かたる

「赤と青、どっちが好き？ どっちも好き！」をテーマに今年度は、現在活躍中の画家8人の作品25点を展示しました。来館してくれたたくさんの子ども達に、気に入った作品を見つけ、その画家にメッセージを送ろうというコーナーを設けました。展覧会後にそれぞれの画家にお渡ししたメッセージの一部を紹介します。展覧会の様子や、子ども達が喜々として鑑賞する様子を想像していただければ幸いです。

「こどものための展覧会2001」 画家へのメッセージ

- 髯嘸sanのグラデーションはすばらしいものです！私みたいな女の子には気に入ってもらえるんじゃないですか。もうベタボレです。
- あいおうさんへ 色の使い方がとてもきれいで、私もまねをしたくなりました。人などを重ねて描くのもおもしろそうだと思います。
- 吉沢美香さんの絵、元気がでちゃいますネ。夏の日射しを避けて入った美術館で、出会えてラッキー！
- よしざわみかさん 私もクルクルとした感じが大好きで、一目見てとても気に入りました。クルクルが重なると、新しいクルクルが生まれる。アクリル板に描かれたそんな赤いクルクルはとても楽しい気分にしてくれました。
- おちだようこ氏 かわいいネコの中に何かするどいものがあるニャー。
- 落田洋子さんへ 私は猫が大好きです。家でも飼っています。なんだか自分の猫に話しかけられているようでうれしかったです。落ち着いた赤のすばらしい世界に巡り合えた気分でした。
- よしたけけんじさんの絵が好きです。かっこいいなあと思った。絵はぐちゃぐちゃだけど、よくみると人の目、口、足、耳、からだ全体がみえてたのしかったし、きれいだった。
- ガヤガヤと人の息遣いや笑い声が聞こえてくるような吉武研司先生の絵が好き。赤との組み合わせの色もすてき。
- ふかざわゆきおさんへ きょうは、サインもあくし

ゅもしてくれて、どうもありがとうございました。わたしは大きくなったらがかになりたいです。もし、がかになれたらえのかきかたおしえてください。

- 深沢幸雄さんの青の発色がすばらしく感動しました。「青い壺の中」もパンフレットとは全然ちがう美しさです。やっぱり実物を見に来なくては！！
- いわいよしてるさま どうすればこんなキレイな青がつかれるのかと、スゴいなあと思いました。さすがです！私青大好きなので感激！
- 岩井壽照さん 曲線がとてもきれいでびっくりしました。「あれって本当に手がきですよ？」ってうたがうくらいきれいでした。
- 齋藤研さんのがいこつの絵がすごかった。横の線がとてもきれいにひけていたりしていた。そして何よりもまわりの貝がくっきりしていて本物をはりつけたよう。できるなら目の前で描いてくださるのを見たかったです。
- さいとうけんさん ガイコツのとなりの人、最高！なにが哀れ気。はじめ男の人だと思った。女の人だった。びっくり。すごいです。
- うえののりおせんせい 今日はありがとうございました。できたさくひんきれいでした。
- 上野憲男さんへ 不思議な世界にすいこまれる感じだった。初めて見るタイプだった。すごい絵を描くんだな。
- 赤のパステルをつくりました。赤にも色々な赤があるんですね。
- パステルづくり楽しかった。こんなに楽しいなんて。すごい！



特別展 ジャポニスム展 高校生のワークシートから見えるもの

本展では、高校生のワークシートによる鑑賞学習を試行しました。

課題は、鑑賞の練習から入って、複数の作品の比較によってジャポニスムの流れを理解しつつ自分の観点から作家の表現の背景に共通する源を探り、自分なり

のジャポニスム観を見いだすことを目標としました。

この試行企画に、近隣の7高校より96名が参加してくれました。生徒は当初の予想をはるかに上回る努力と極めて多彩な感性を見せてくれました。当日、閉館時間いっぱいまで会場を離れない多くの生徒の粘りに

まず驚かされました。更に、ワークシートに記された一人ひとりの考えや何かを探し求める姿勢とユニークな発想には、大人には真似の出来ない彼らならではの新鮮でひたむきなものを随所に感じ取ることができました。字数の都合上内容はここで詳述出来ませんが、彼らの回答の奥に主に次のことが読み取れました。

1. 美しいもの、感動を与えてくれるものが好きである。
2. 気に入った作品に対して、より深く見ること、知識を得ることにことのほか貪欲である。
3. 自分の見方、感じ方に共感を求めている。また正しいかどうか確かめようという気持ちを抱いている。
4. 独自の発見を求めている。

平成13年8月1日～8月7日まで、7大学8人の学生を受け入れて博物館実習を行ないました。皆、自分たちの学芸員の仕事に対する想像とかなり違っていたようです。実習レポートの抜粋を紹介します。

◆学芸員はサービス業である。一番に対象者の気持ちを考える。これは何をするときにも大切なことだと思います。学芸員になる、ならないは別として、自分も知識や社会常識と応用力、向上心を持っていくことにします。(デザイン専攻)

◆美術館には年齢や性別、職業等、あらゆる立場のお客様が訪れる。多種多様なお客様に対応できる魅力的な話し手、聞き手になれるようがんばりたい。(哲学専攻)

◆学芸員と入館者とのコミュニケーションを大切に、従来の博物館という形態を変えてゆくことがこれからの博物館への課題であると改めて身を

5. 見ることによって描きたい(表現したい)という気持ちが揺り動かされている。

少々心理的側面寄りの見方ですが、鑑賞学習の最も大切な部分として、感動する心を自分で分析し自分の表現に応用していく(自分の物にする)ことが彼らの鑑賞活動に含まれており、その発達を彼らが求めていることが改めてわかりました。今後も、文化に関する知識的な教育はもとより、彼らの感性の根幹を構築する能動的な情操育成の学習活動を、効果的にサポートしていけるよう更に工夫し発展させて行く新たな課題を感じています。

博物館実習レポートから

もって感じる事ができました。(美学美術史専攻)
◆絵の知識があるだけでは全く学芸員としてやっていけず、いつでも“誰かに伝える”という気持ちを忘れずに仕事をするものだとよくわかりました。(芸術学専攻)

◆自分が書いた作品解説の文章を簡潔にしようと思いついた時、自分がいかにステレオタイプな難しい表現を使っているかに気が付き愕然とした。普段、教員や権威のある学者がさも難解な表現を使うことに嫌気がさしていたのにも関わらず、自分も同じ様なことをしていた。博物館のことを外に向けて説明する時、大切なのはそれを受け取る側の人々の言葉を用いることなのだと思う。

(史学専攻)

普段、職員が気をつけていた事を実習生も理解をしてくれたようです。お客様に喜んで頂ける美術館作りの大切さを改めて感じました。



実技講座のご案内

■金工講座

- 内容 彫金の技術や制作行程の習得講座
- 日程 1/24、25、26、29、30、31
2/1、5、6、7【全10日間】
- 講師 小林 正利氏 【定員20人程度】

●費用 14,000円(予定) * 1月14日必着

■篆刻講座

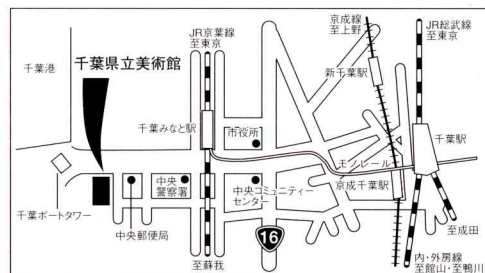
- 内容 篆刻制作の基礎的技術の習得講座
- 日程 2/20、21、23、24、27、28
- 講師 細谷 長生氏 【定員20人程度】

●費用 10,000円(予定) * 2月10日必着

《申込方法》往復はがきに、講座名・住所・氏名・電話番号を記入のうえ美術館普及課まで。なお定員を超えた場合は抽選に。締切日必着。

<美術館案内>

- JR「千葉」・京成電鉄「京成千葉」駅より「千葉ポートタワー行」バス15分「美術館・中央郵便局前」下車徒歩1分
- JR(京葉線)・千葉都市モノレール「千葉みなと」駅下車徒歩8分



〒260-0024 千葉市中央区中央港1-10-1
☎043(242)8311(代)

